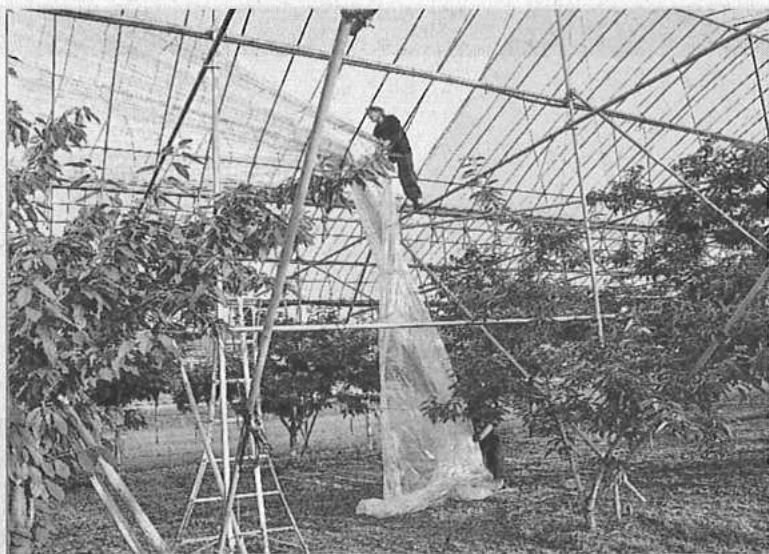


幸福の赤いサクランボ

多田耕太郎 1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・7畝のサクランボ園を経営する。

今シーズン、当農園のサクランボの本格的な収穫作業は昨年より3日早い6月14日から始まったが、終了したのは昨年と同じ7月6日だった。収穫は佐藤錦から始まり、最後は紅てまり。3日早く収穫が始まると、例年なら3日ほど早く終わる。だが、昨年と同じだったのは、好天に恵まれて豊作だったという今年ならではの理由のほかに、サクランボ農家が直面する構造的な要因がある。

周囲の生産者の収穫状況を聞いてみると、今年は例年になく結実数が



人手不足 収穫の適期逃すことも

多かった上に、作業者の高齢化や人手不足などで収穫前に余分な実を摘む摘果など、品質向上に欠かせない作業が追い付かなかったという声が多かった。

そのため実が多い状態が続いてサクランボの品質低下を招いたり、収穫の適切な時期を逃してしまったりしたという方もいた。収穫の適期に摘まれなかったサクランボは柔らかくなってしまう売り物にならない。

例年なら佐藤錦の収穫のピークは6月25日前後。紅秀峰などの晩生の品種は6月末から収穫が始まるが、人手が確保できず、25日にはすべての品種の収穫作業を切り上げてしまった方もいたという。生産者の間では「豊作貧乏とは今年のような作柄のことを言うんだな」などという声も聞かれた。

収穫できず木に残ったサクランボは放置され、熟し切って地面に落ちるか、カラスなどの鳥がついばむ。地面に落ちたサクランボはカビが生える。その孢子が地表に残ってしまう、翌年のサクランボにもカビが生える「灰星病」のリスクが出てくる。木に残ったサクランボが、木の活力を奪ってしまう可能性もある。

私の農園では幸いこのようなことは起きていないが、将来のことを考え、若手社員には栽培技術だけでなく、作業の工程や人手などを効率的に管理できる能力を養ってほしいと思っている。

収穫が終わったサクランボ畑で雨よけのビニールを取り外す。高さ4メートルほどの足場で慎重にはがしていく

山辺町